

大学



アスリートにゴルフを教えるコーチの窪田さん(右)＝名古屋市南区で

来月開催「スペシャルオリンピックス・愛知」

知的障害者
輝く舞台に

知的障害のある人々の四年に一度のスポーツ大会「スペシャルオリンピックス(SO)日本夏季ナショナルゲーム・愛知」。九月下旬に愛知県内で開かれるのを前に、知的障害の人々の現状やスポーツの可能性を知りたいと学生スタッフが日々の活動を取材した。大会には約千人のアスリートが参加し、十三競技の試合は無料観戦できる。その頑張る姿を見て、あなたも共に生きる社会を考えてみませんか。



金曜の夕暮れ時、名古屋市南区の笠寺フジゴルフセンターでは、SOのアスリート四人が汗を光らせクラブを振っていた。SOは、知的障害のある人々にスポーツトレーニングと、その成果発表の場である競技会を提供している国際的なスポーツ組織だ。パラリンピックスは主に身体障害者が対象だが、SOは自閉症やダウン症などの知的障害者が対象で、参加する人を「アスリート」と呼ぶ。

コーチと一緒に成長
今回の取材で、スポーツを通じてアスリートとコミュニケーションが合じ知覚し感を感じた。成長していくのだから、大切なことは、障害を乗り越えていくこと。今後の社会で活躍する私たちがしっかり考えていきたい。

愛知教育大2年 新海亮太



共生への一つの挑戦

取材前、SOは障害者の支援組織だと思っていた。実際に挑戦しているのは、共に生きる社会が作られている中で、互いに歩み寄って生きていくこと。寛容で力強いことを学んだ。

名古屋大4年 土井紫乃
スポーツを通じ、アスリートとコーチ、家族の信頼関係も築かれる素晴らしい取り組みだが、課題は知名度の低さやボランティア不足という。窪田さんは「同世代との交流はアスリートの刺激になる。ぜひ若い方々にSOに関わってほしい」と呼び掛けた。(愛知教育大1年・新海亮太、南山大2年・神田彩乃)

ボランティア不足

アスリートに共通するのは、スポーツが楽しく、もっとまくなりたいという心。松本裕斗さん(左)は「ゴルフが楽しいから仕事も頑張れる。試合も出たい」と熱く語る。バスケットボールやスキーなど複数の競技を楽しむ人も多く、新実澁平さん



八塚事務局局長(中)を取材する学生スタッフ＝名古屋市千区で

「(中)は「たくさんさんのコーチやアスリートと仲良くなれる」と笑顔。母親は「人と交流する楽しさを感じられる機会をつくってあげたい」と話した。

「やり切る姿は感動的」

八塚奈保子事務局局長に聞く

SO日本夏季ナショナルゲーム・愛知の八塚奈保子事務局局長(中)に聞いた。
元々体育教師を志していた、一九九九年からSOに参加。スポーツには可能性があり、障害の有無に関係なく、与えられた環境で自分ができることを見つ

けることが大切と学んできた。SOはスポーツを通じ、社会で生きていくためのマナーやルールを学ぶ。障害があるからいい、ではない。健常者も障害者も歩み寄るべきだと思つから。大会ではメダルに届かなくてもリボンがもらえる。親元を離れチームで生活するなど全てが大きな挑戦。厳しいルールの世界でスポーツをやり切る姿は感動的だ。勝たいたい気持ちも生まれ努力や目標につながる。

大会は日常の積み重ねを披露する場。華やかで、関心のない人にも知ってもらおうチャンスだ。まずは若い人に魅力を感じてほしい。スポーツで活躍する姿から、人として尊重することを学べる。知的障害の人々に対する無知による偏見を、社会に出る前に克服する機会に、大会後も興味を持ち続けてもらいたい。(名古屋大四年・土井紫、相山女学園大三年・北村菜摘)